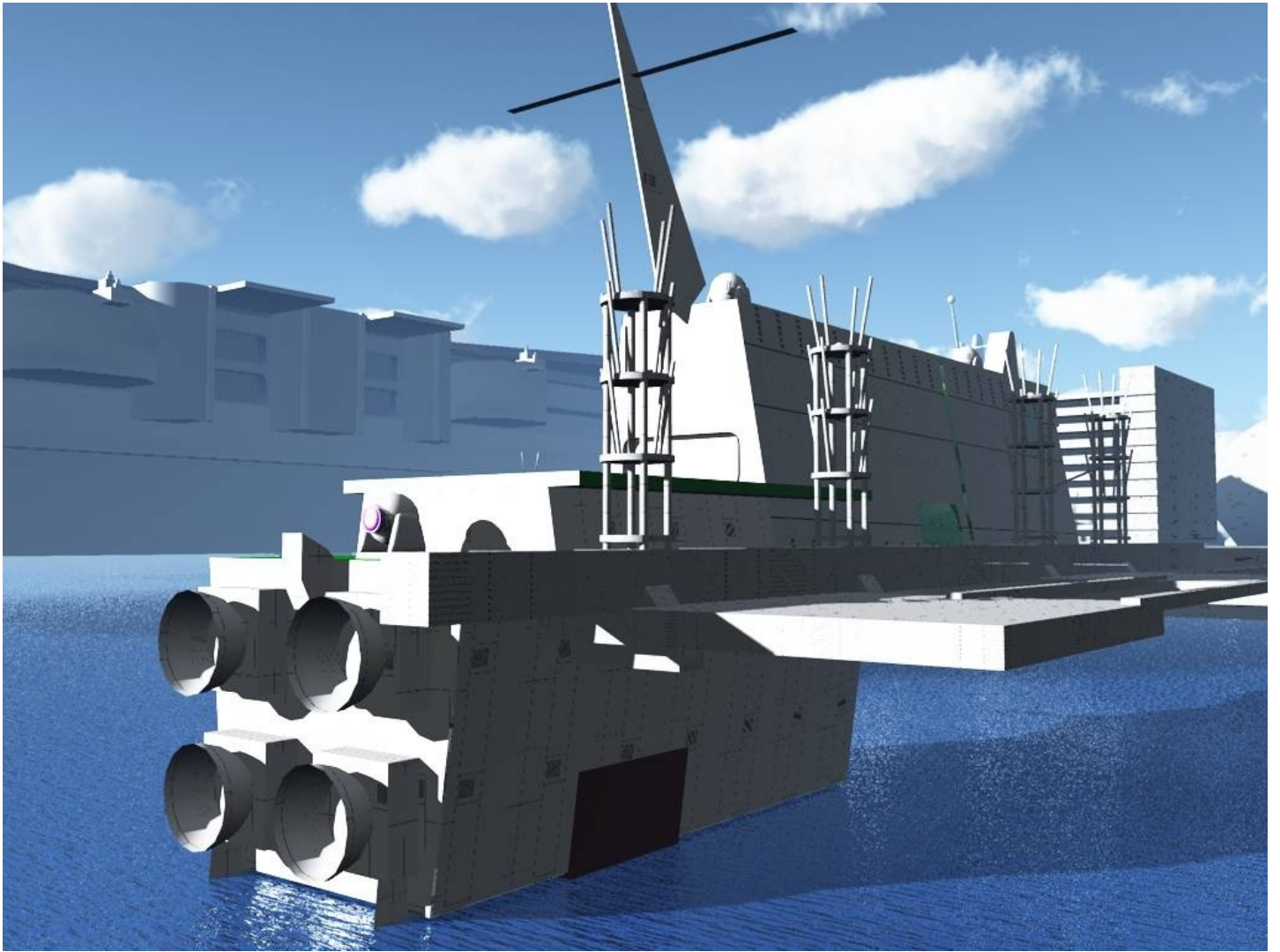


A 3D rendered character, Princess Plastic PLUS, is shown in a dynamic pose on a go-kart. She has a blue and green outfit with a white visor and is holding a blue sword. The go-kart is red and grey. The background is a dark, industrial-looking environment with a grey floor and a dark ceiling with structural beams. A blue graphic element, resembling a stylized wing or a lightning bolt, is overlaid on the scene, framing the character and the text.

Princess Plastic PLUS  
プリンセスプラスティック プラス

# 約束の空





支援巡洋艦〈ちよだ〉では、皆がホログラフィディスプレイを見ていた。  
「シファの運搬台車接続か。でもこの台車、電源も供給できるけど、それだけだもんなあ」  
「なんか凄い手作り感たっぷりの台車だよねえ。だってカタパルトバー使わない射出なんて時代遅れも  
すごいよ。帝国海軍の時代じゃないか」





「ええ。でもシファが歩けない時や、カタパルト射出が必要なときは使いますからね。プライドルも今度から使わなくなりますし」

「整備用にも使ってますからね」

そこに、シファの作戦を指揮する99任務群の作戦幕僚の戸奈実三佐がやってきた。

「はい、ちょっと説明。会議室2に集まって」



「この度、欧州連合軍でやっていたJDSプロジェクトのXX-135が戦闘性能試験で中国空軍の酒泉空軍基地に来ます。

酒泉はシファの建造にあって、ミスフィの暴走で崩壊したテオス2に最も近い空軍基地。そこでシファとXX-135の対抗戦闘試験をすることになったわ」

すうと整備の皆がぶうぶういう。

シファは彼らが整備する、女性型女性サイズの戦艦である。

11万トンの武装をワームホールの向こうに隠し持ち、強大な防御シールドを展開して防御する、世界で最も小さな、そして強力な戦艦で、その破壊力は天文学的な域に及び、戦略兵器としても戦術兵器としても画期的なものだ。

その防御は回生シールドにまで達した。なんと相手の砲撃エネルギーを一度エネルギーフライホイールに蓄え、攻撃エネルギーにしてしまうのだ。

「だってJDSって現在目下大炎上中の計画でしょ。シファ級と組んで使う戦術BN-Xっていう触れ込みの欧州共同開発でユーロファイター社で作ると言っても、当初のXX-132とXX-135の競作どころか132を蹴落とすような判断で135に開発リソースを再集中しても開発費高騰、問題続出で、シファ級のダウンスペックバージョンの山崎重工サイレントウイングナイトを代わりに入れるなんて話があって、それでも欧州軍は優柔不断というか当事者能力なしで、結果現在さらにますます炎上みたいなの」

「それが現物ができちゃったのよ。私もびっくりしたわ。『計画大絶賛遅延中』のはずが、ここ数日で進空式を終えて、静強度試験から航行性能、火力性能試験まで一気にやったって」

「人柱が何人でたかなー。かなりのデスマーチだよ。デジタルキネクトモックアップの時代とはいえ」

「うちはテイ教授以下、近江さんと御門さんがいたから何とかなったけど」

「あの時はプリンセスプラスティック計画で原爆開発のマンハッタン計画張りに開発したから。JDSは開発費が高騰したといっても、シファたちよりはまだ安いよ」

「ほんと？」

戸奈実がしまった、と口を抑える。

「あーあ、言っちゃった」

「いいよ、僕らで内密に」

「ごめん、本当にごめん！」

彼女は平身低頭する。

「で、それはそれとして」

99任務群の宮山司令が画像を出す。



「これがXX-135だ」

「なんか」

「かわいいね」

「ほんと。もっと悪役の顔かと思ってたのに」

「XX-35、オディールというそうだ」

「バレエの『白鳥の湖』のヒロインですか」

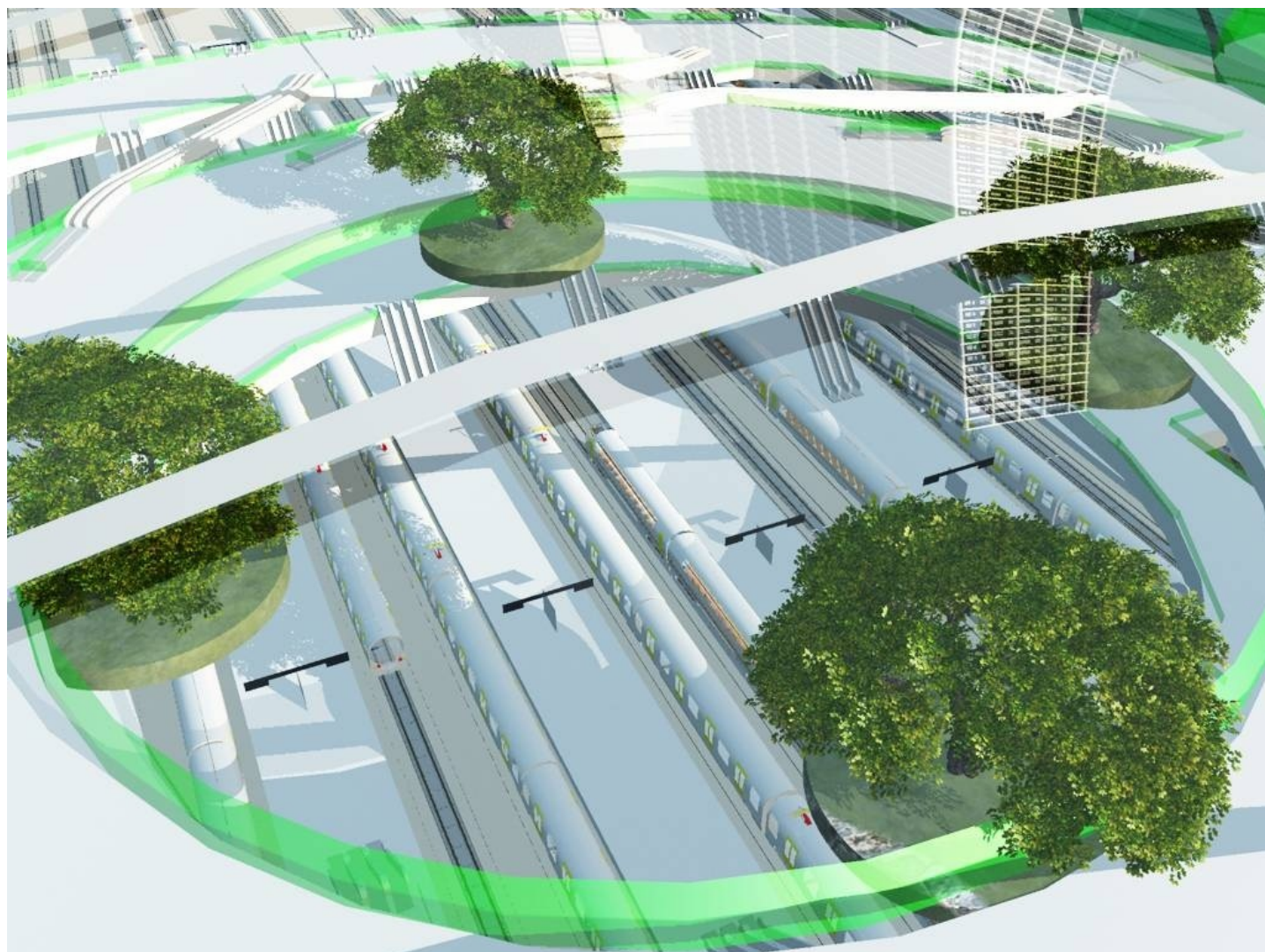
「バレエは正解だが、しかしヒロインの偽物の方だ」

早速、対抗評価試験がスケジュールされる。

「で、当のシファは？」

「新淡路の古書店に買い物に行ってる」





「まずいわ！ 電車の乗り換え間違えちゃだめよね。まさか快速特急が止まらないなんて。ダイヤ改正ってだから嫌なの！」

シファはそう独り言を言いながら新淡路中央駅のコンコースを走っていた。  
「いつもの古本屋さんに取り置き頼んでたのに取り置きの引換期限まで時間ないなんて。このままじゃオークションになっちゃうし、そうになったら絶対競り合いになるわ。あの本絶対読みたくてウォッチリストに入れてたのに。もうっ、支払い多いとまた戸奈実さんに怒られちゃう」

その時だった。

「危ない！」

シファは、コンコースの角から出てきた女の子と正面衝突し、おもいきり倒れた。

それも、透明素材の窓に倒れこんだのだ。

窓が転倒音を余計に大きく響かせた。

「大丈夫ですか！」

「救急車呼んで！」

周りの通行人たちが叫びながらシファを助ける。

「いたたた」

シファは腰と額を抑えるが、気づいた。

「あれ、ぶつかった相手は！？」

「えっ」

「いや、見てない」

「ほんと。まずそれより君が心配だよ！」

通行人は口々にいう。

シファは痛みに耐えながら、頭をぶつめた相手のことを気遣っていた。

そこに救急エアバイクが降りてきた。

そのエアバイクの救急隊員が、近距離通信で気づいて、さらに驚いて通信本部にコールした。

「こちら新淡路救急82号、駅コンコースでダークスターがインシデント！」

ダークスターとはシファ級BN-Xの暗号名である。

\*\*\*



すぐにシファの整備責任者、機付長の沖島以下、整備チームが整備車両で到着した。  
「シファ、セルフチェックもう一回やって」  
車内でシファは肯き、胸元の大きなサファイア色のペンダントに触れた。  
「おかしいなあ」  
沖島が首を捻る。  
「ATSも作動していないし、ワームホール内の機器をシファと接続するNexzipの取得が失敗してるログがある」  
「作動していない？」  
「ああ。やっぱりおかしいよこれ！ テイ教授のチームに解析を頼まなくちゃいけない！」  
「でも、ただぶつかっただけでしょ」  
他の皆がいう。  
「シファはぶつからない。ATS、アンチタッチシステムがモノとぶつからないように自動回避し、それがだめならシールドを張って防御する。モノだけじゃない。砲弾や銃弾もこのATS、ATS-Pが警報して防御と回避をする。これは24時間つねに警戒し、対応するノンストップシステムだ。  
それが一瞬だけど、働いていない。データロガー、記録装置にそれが残っている」  
「まさか」  
「そう。シファが一瞬、丸裸だったんだ。その瞬間に何か食らってたら」  
皆が眼を見合わせた。  
「シファが破損、さらには沈没してたかもしれない！」

「いやびっくりしたよ。本当に」  
テイ教授は歩行可能なカプセルの中に収まった全身麻痺の男性である。しかしその頭脳はアシストシステムを介して高度学術情報コーパスに繋がっているが、それ以上に鋭い考察をし、時間と空間の秘密を明らかにするNexzip理論を導き出すべく北京大学物理学センターのセンター長として活躍している。  
「データロガーは正常だ。4重系のロガー4機それぞれが同じATS無効化とNexzipの割り当てエラーを記録している。非常に気づきにくいここに気づくのは沖島君ならはだね。普通は単なるATSの不具合、故障か、システム誤作動と思う方が普通だ」  
「ATSの整備はシファの重要なシステムです。念入りにやっていますから、もしやとおもったら」  
「ああ。全く、危うくシファ級戦艦1隻喪失という恐ろしいことになる所だった」  
そのやりとりを見ていたシファが口をはさむ。  
「でも、ぶつかってきた子、誰だかいまだに分からないの」  
「覚えてるでしょ。画像系システムはおかしくなかったんだから」



「そうなんだけど、痛かったらうなあ、って」  
みんなコケた。  
「それどころじゃないでしょう！」  
「だって、かわいい女の子だったような」  
そのとき、「沖島曹長、対抗戦闘試験のプリセットの予備データ、部内共有にアップしました」と声  
が聞こえた。  
「ありがとう。ご苦労様。ほんと、世の中戦艦増えたからなあ。シファ級がミスフィと他国に6隻で8  
隻いるんだもの。でもこれ、危うくその1隻が撃沈される場所だったとはね。  
不注意で撃沈されかかるといけば、こんな可愛い」  
シファが驚いた。  
「この子！」  
「えっ！」



「この子とぶつかったんです！」

みな、びっくりした。  
「いつの間に！」  
そのとき、艦内アナウンスが鳴った。  
「内閣調査庁調査局・片山局長が乗艦されます」



片山は鳴門の後を受けた、鳴門のかつての同僚であり、親友である。鳴門は国家A試験有資格者割愛願いを出して内閣調査庁を辞めた、シファの恋人であり、現在神奈川県庁から相模原行政センターに向向となっている。

「片山さんもたいへんですね」

「そりゃ大変だよ。鳴門から引き継いだ事案はどっさり、津島元次官に早瀬元次官と2代の事務次官が相次いで辞めて、その救世主のはずの鳴門が13人抜きの抜擢の次官の席を蹴ってやめちゃうんだもの

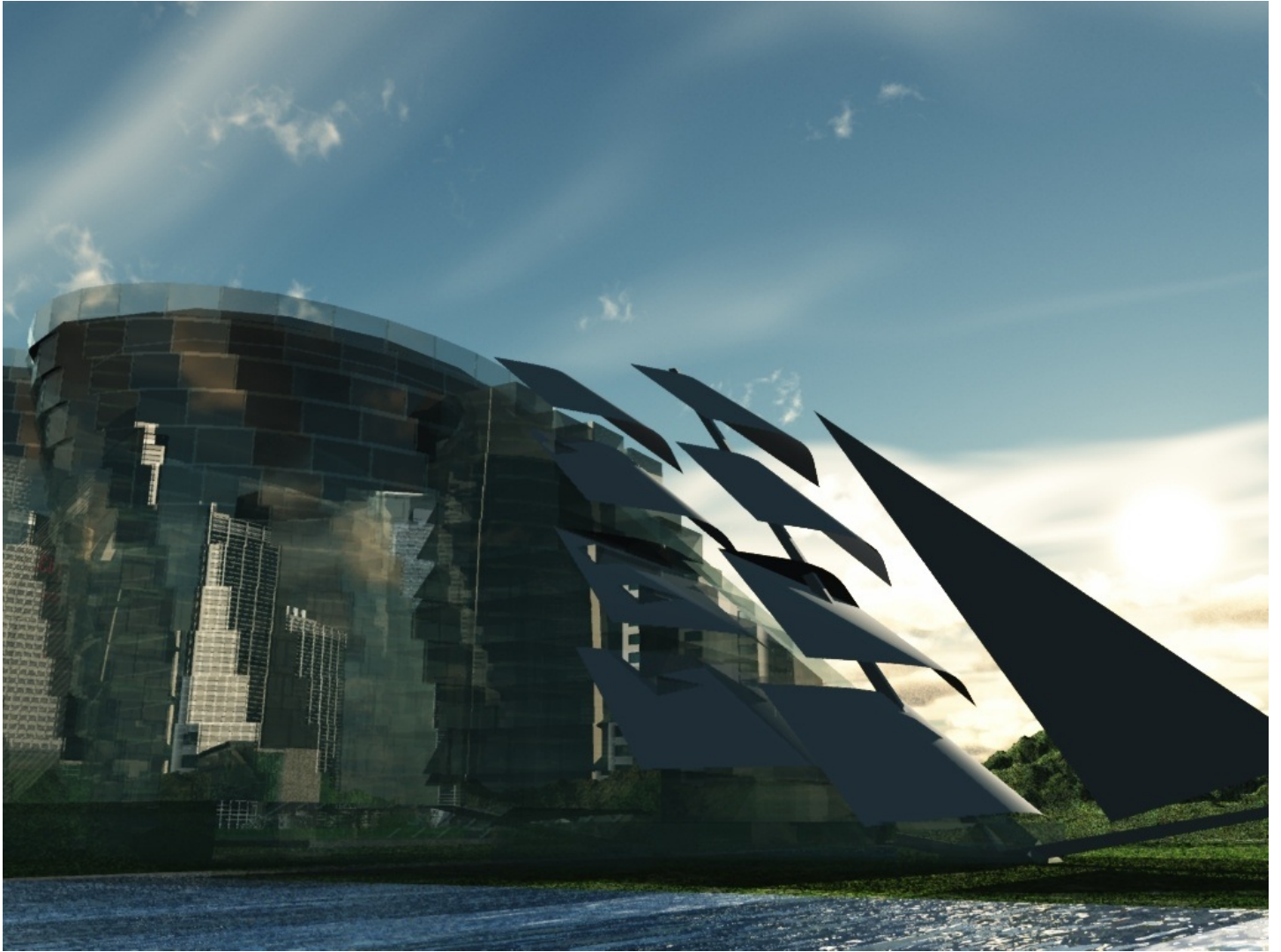
。庁内はおかげでガタガタだよ」

「片山さんも次官になるんですか」

「いや、まったくわからない。ただ、鳴門が戻ってくるまでは頑張るよ。そして、鳴門を追い出したバカどものいる官界がおかしくなっていくのを前展望席で見てやろうと思っている」

「タフですね」

「タフでもこれは困った。国会防衛委員会でどう説明するか。ましてオディールの認証と位置情報添付の視野情報データにシファが写ってたら、内閣は責任とって総辞職ものだよ。戦略兵器がこれじゃまずいよまったく。



とりあえず外務省が内々に欧州連合にあたってる。もちろん極秘ルートだ。一応シファ級BN-Xのシルフ・エウロパが欧州には欧州連合軍の指揮のもととはいえ、いる。

彼女たちの存在は抑止力以上の効果を持っている。BN-Xの国際共同保有とそれによる平和を宣言したツリートップ宣言は有効だしね。

ただ、欧州はそれなのに何がしたかったのか。分析局はその分析で総動員で分析官はロボットと共に庁舎内で徹夜」

「ここでもデスマーチか」

「まったく。とはいえ、Nexzipを書き換える技術のこんな応用は」

片山に続いて、テイ教授が高次元物理シミュレーターの画像を取り出した。

「細かい数式は参照しておくけど、まず5次元ブレーンと呼ばれていた物理論の拡張、26次元弦理論のコンプレックス予想に置いて、あの時の時空ポテンシャルを観測艦〈あすか〉などの観測データと合わせると、解の範囲はこのようになる。

そして求める解は26次元パラメーターのうちの5次元で実数空間を示し、ゲートホールとしての値の3次元は正、負、虚数を示す。

それと論理グローバル空間の次元をこの8次元パラメーターの行列関数とし、残りを遺伝子的アルゴリズムによる最適化が働くとして演算する。

その結果がこれだ」

「シファの量子実装武装、ワームホールの向こうの武装がすり替わってる。しかもそれがもうひとつの同様の武装による量子干渉縞の共鳴によって」

「そうだ。シャボン玉のようにこの空間は干渉し合い、膜、ブレーンを作り、そして入れ替わる寸前で均衡する。

つまり、この間は同時に双方、武装のある空間にはアクセスできず、生身の体しか使えない。  
特にシファにとっては拡張臓器も全て無効だ。代謝能力を上げたハイモードでバイオ筐体を駆動するシファ級は、8時間でエネルギーを失ってそのバイオ筐体を喪失する」  
「つまり、この状態に陥ると、シファは白兵戦にもちこまれるのか」  
「ああ。ただ、この条件を拘束する関数の解の範囲は非常に狭い。ワンチャンスだ」  
「しかし、確実に」  
「そのとおり。計算によってこの状態に追い込める。鉄壁以上の装甲と防衛システムATS-Pの穴だ」  
皆が息を吐いた。  
「プログラミング的にこの状態を回避すべく、近江はATS-Pの改良を考えているが」  
「またデスマーチですか」  
「そうなるな」  
「でも、これが本当にオディールが作った状況なら、今度の対抗戦は」  
宮山司令は肩を崩して諦めたように言った。  
「仕方ないさ。白旗を揚げるしかない。近江の修正ATSをあてにしても間に合わんだろう。現状のシステムを失なうぐらいなら、悔しいがXX-135・オディールに十字勲章をやるしかない。潜航できなくなった潜水艦の運命と同じさ」  
シファは考え込んだ。  
「でも、こんなことになったら」  
彼女の言葉に、宮山は笑った。  
「努力でもどうにもならない限界はだれにでもある。無敵を誇ったものが無敵であったためしなし。あきらめよう。」  
「だいたいシファ、君はアシストシステムなしには自転車にも乗れないほどの極度の運動音痴だ。剣術もアシストシステムを使って補助しているんだし」  
シファは言葉がつけなかった。  
「いいさ。どの兵器にも、こういう時は訪れるんだ。近江が上手くいったとしても」  
皆黙り込んだ。  
「はい、じゃあ、訓練の準備を。解散！」

皆が持ち場に戻っていく中、シファは宮山司令の後ろ姿をみつめていた。  
そして振り返って香椎に聞いた。  
「香椎さん、香椎さんは白兵戦の銃剣術とかのインストラクターしてたわよね！」



主整備室の後ろ、第1搭載機格納庫で、どん、どん、どどどんと足の踏み込みと、竹刀と木銃の叩き付きあう音が響いている。

「香椎さん、ちょっと40秒待って！」

シファが足をガクガクにしながら、竹刀を構え直そうと息を整えている。

「オディールはそんなの許してくれないわよ」

香椎はレオタード姿で汗を散らして笑う。

整備格納庫にクッションを敷いて、香椎さんの木銃にシファは竹刀を構えて、接近戦訓練が行われている。

「香椎さん、ほんと強いよね」

「そう。だからあなたの母艦の警務長になれたのよ。これでも格闘技能・甲をいくつもってるんだもの。ただの大食いじゃないわよ」

「そうよね」

シファは息を整えた。そのとおり、シファとミスフィの運用のために、ちよだには各術科で技量・甲の優秀者が集まっているのだ。

「じゃあ、はいっ！」

香椎が構える。

そして、どどどと踏み込む。

それをシファが竹刀でかわそうとする。

香椎はそれを木銃の銃床で一気に押し上げ、体当たりした。

シファと香椎が吹っ飛ばすが、香椎が先に姿勢を戻す。

「やっぱり、無理よ！」

シファが肺の奥から苦し気にいう。





それを宮山司令と運用幕僚の戸奈実が見下ろしている。  
「しかし司令、上手くノせましたね。シファがこんな特訓をするなんて」  
「まあな。一応これでもシファだけじゃなく、いろいろな装備品のテストをしているからな」  
「シファをこうやって操縦するんですね。シファはシファなりに、司令に認められたいんだな、なんて思うと、なんだか」  
「ああ。命令と服従だけじゃこういう組織はやっていけないから」  
「私もそうなりたいんですけど、なれませんか」  
「そりゃそうさ。俺だってこうなるまで歳もかかったし」  
「そう言いながらゴシップとエロスのデータマガジンなんかめくって」  
「仕方ないよ。俺もおじさんだから。というか、もう昔で言えばおじいさんだからね」  
宮山は微笑んだ。

その時、シファが弱音を吐く。  
「私には無理ね。やっぱり」  
「そう思った時が限界ね。でも私にも限界はある。限界のないものはない」  
「じゃ、無理そう」  
すると、香椎は『ミスフィ』と声をかけた。  
シファの姉妹艦であり、双子の妹であるミスフィが、特訓を見ている整備員たちの中から出てきて、竹刀を取る。  
「はいっ！」  
どん、どどどん！ どんっ、どん！  
ダンスのようなリズムと共に、香椎の繰り出す銃剣術の突撃、斬撃をミスフィはたくみに竹刀でかわし、いなし、逆に攻勢にも出る。  
皆が息を飲んでその様子を見ていた。  
ミスフィは全くの互角まで戦っている。  
そして、香椎がふっとシファにアイコンタクトした。

シファは息を整え、再び立ち上がった。  
「香椎さん、やっぱりお願いします」  
香椎はそのシファの声に頷き、ミスフィは竹刀を止めて、ふっと笑った。  
「じゃ、集中力切れないうちに、この戦術の要点を。こういう体育的なことは物理学だから。だからミスフィはできるんだし、シファ、あなたにもできないわけがないの。  
体育の苦手は基本的に、力学で正しい身体の使い方とトレーニングをしていないために発生するものだから」

「しかし、シファも香椎さんも頑張るねえ」  
「もう赤面しちゃうほどのスポ根の世界まっしぐら。シファには似合わないと思うよ」  
「そうだよ、シファって文化系の感じだし」

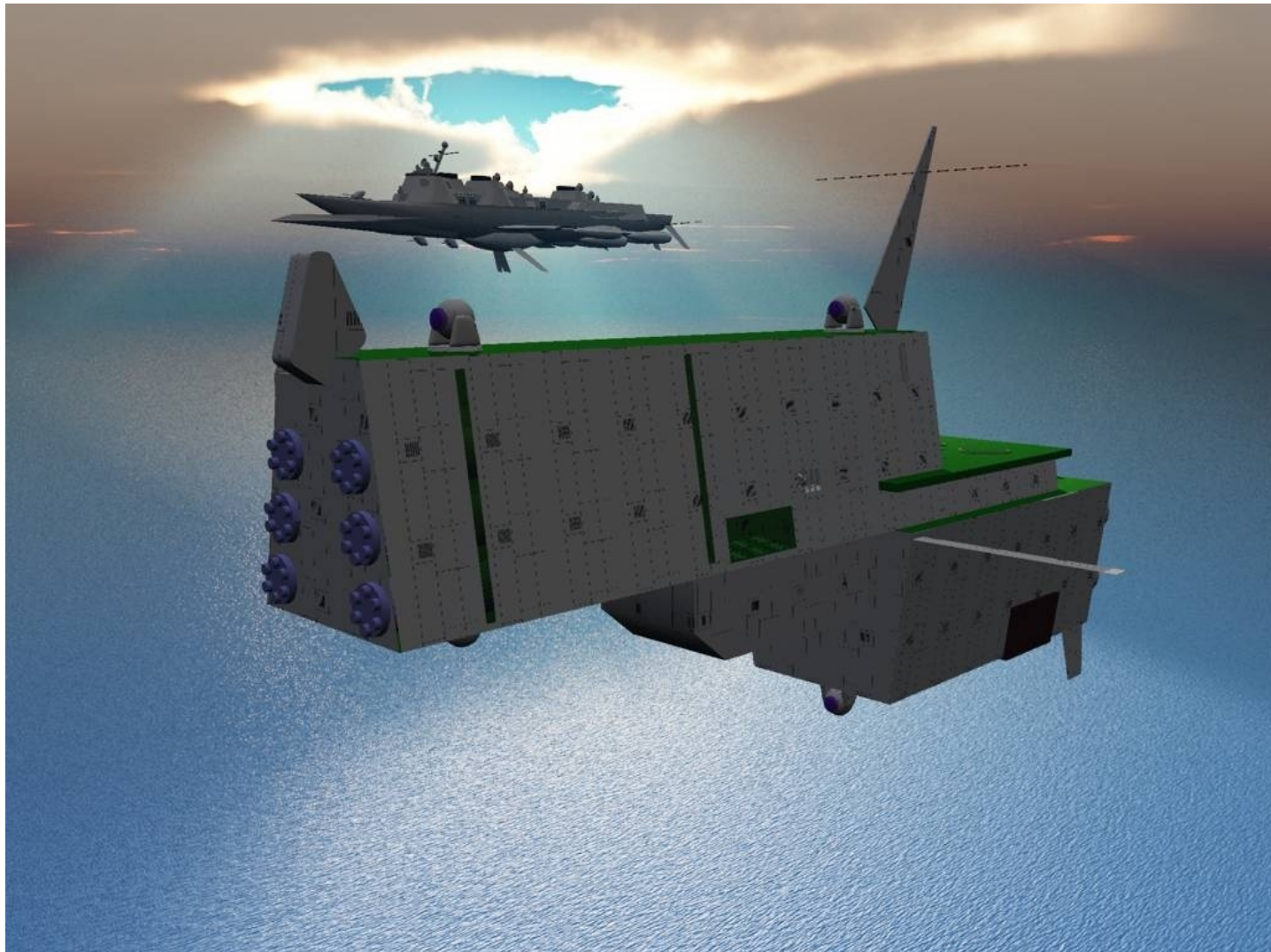
「でも、それをがんばるのがシファらしくていいじゃん」  
「オディールは何がしたかったのかな」  
「あんなかわいいのに。外務ルートは？」  
「応答なしてさ。むしろオディールの応答を失ったのは向こうらしい。  
国際共同の莫大な予算で作った期待の新戦艦JDSが勝手に身を隠して新淡路に来てるなんて、そりゃ向こうだって大臣の首がボンボン飛ぶことになるさ。それが民主主義のシビリアンコントロールってもんだ」



「あんなかわいいのに」  
「可愛いものは怖いよ。可愛いを作るには表現に幅がないと。  
作ったデザイナーの豊かな技量と、それ以上の熱い思いが感じられるよ」

当日

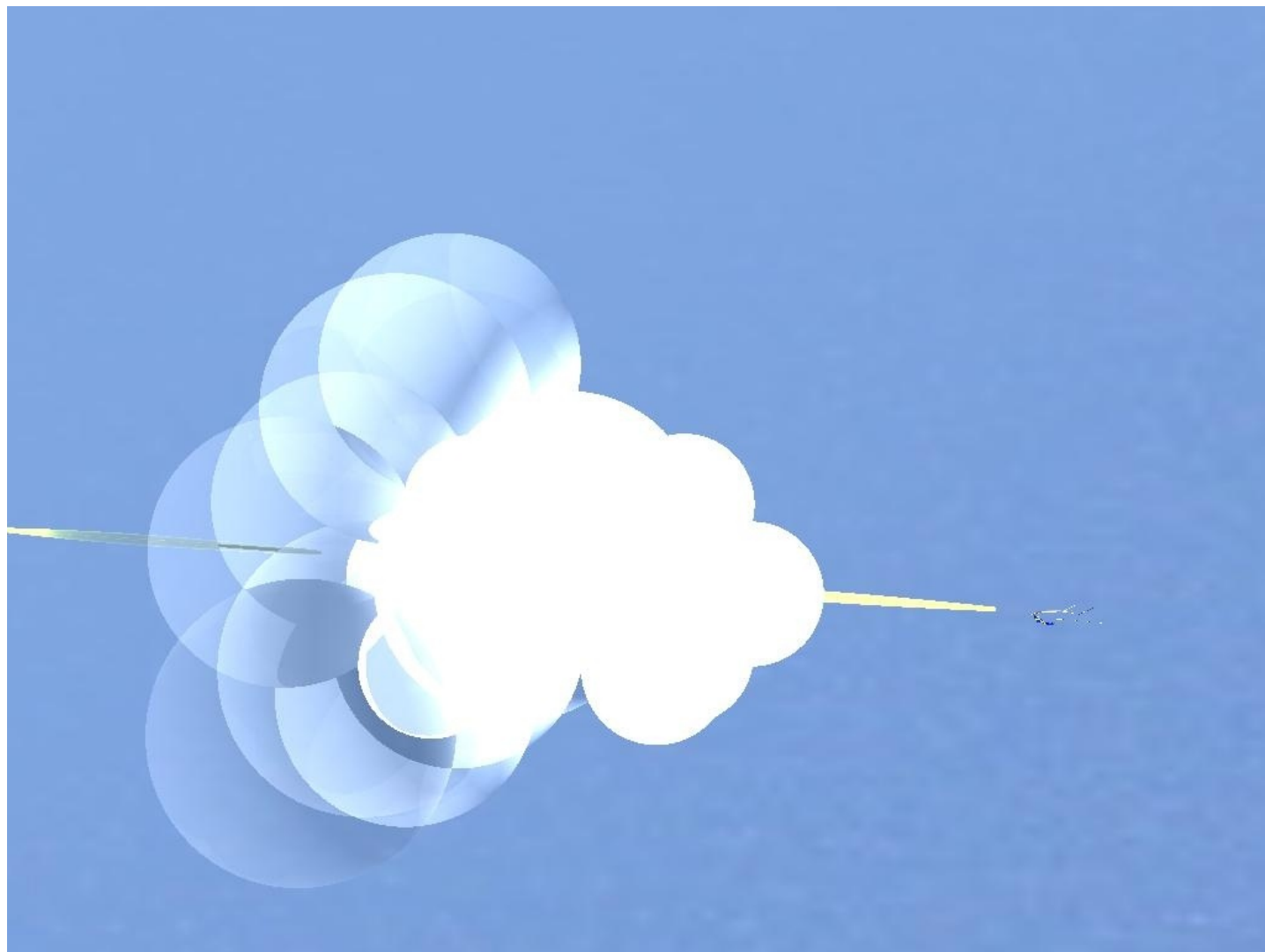
そして、シファのルックアップトップ、視野内で直ぐに目に入る領域のカレンダーの逆算表示が尽き、その日がやってきた。



母艦ちよだはゴビ砂漠まで移動している。  
「シファ、フライトとミッションのプランを確認した。  
片山局長情報によれば、例のすり替えシステムは「フィールド・リムーバー」と呼ばれるもので、テイ教授の予想通りだった。向こうにも頭のいいのがいるのね。もともと東欧には物理数学の天才を生む土壤がある」  
戸奈実がブリーフィング室で説明をしている。  
「とりあえずシファ、おもいっきりやっていいわ」  
シファは頷いた。  
「でも、私が負けたら」  
「さあね。でも、宮山司令はあなたを信じてるわ」  
シファは笑った。  
「じゃあ、ご期待に添えるように、がんばります」  
「そうね。いいわね、さすがシファ、あなたのそういうところに鳴門が惚れたのね」  
「香椎さんにミスフィが惚れるのも」  
この部屋の皆が笑った。  
香椎は女性だし、ミスフィも女性型なのだが、二人は互いを恋愛対象としている。  
「それ言えるぐらいだもの。大丈夫よ」  
シファは頷いた。  
「では、時刻整正」  
「整正よし」  
「じゃあ、出発！」



「さて、シファ、よくやったわね」  
リプレイが流れる。  
訓練は終わっていた。  
遠距離砲戦から、訓練は始まった。



シファの533mm砲と、XX-135オディールの600mm砲の撃ち合いになる。  
533mm砲はMod2に更新されて、600mmと互角の砲力になっているため、勝負は着かず、オディールは間合いを詰めだした。  
間合いを詰められたシファは逃げまわりながら、岩石砂漠からビル棟分の岩を外部質量誘導で持ち上げ、それをオディールに叩き込むマスドライバー攻撃を仕掛ける。  
オディールはそれを衝撃波で破壊し、なおも追いかけて、ミサイルを連射する。  
その凄まじいミサイルの奔流の中、シファが剣を抜き、プラズマデコイを振り回して追尾してくるミサイルを次々と破壊する。  
そして反攻に転じ、突撃するが、シファの脳裏で「パターン接近」の警告ベルが鳴る。  
チンチン、チチンと鳴り狂うその音は、フィールドリムーバーの干渉パターンが接近していることを示す。  
近江がATSの改良が間に合わないかと悟って、かわりに徹夜でプログラミングした干渉接近警報プログラムだ。  
オディールが装備のライフルに着剣する。  
銃剣と剣の戦いとなる。  
そして「ジリリリリリ」とベルが鳴る。ついにフィールドリムーバーが作動したのだ。



しかし、シファもそれを望むところだった。  
脇をしめて、間合いを詰めて、とシファは呪文のように繰り返しながら、立ち向かう。



激しい剣と銃剣の打ち込み合いになった。  
日が傾くまで、互いの死闘が続いた。

そして、日没となり、訓練統裁判官、訓練を管理する指揮官が、時間切れを宣言したのだった。

試験の終わった酒泉基地の高層ビルでは、リプレイとロガーの記録が繰り返して再生される中、〈ちよだ〉整備チームとシファの建造チームが議論していた。

「ユーロファイター社のビルでもほら、こんな夜まで明かり付いてるよ。向こうも徹夜だろうな」

「ああ。今回はドローだが、2 on 2でディフェンスとオフェンスに別れたやり方もあるだろうし」

「で、第2回はあるんだろうな」

「どうだか。政治的決着をはかるとい話もあるさ」

技術者たちが口々にいう。

「ええっ！」

「兵器は外交の裏打ちである防衛力をつくるもので、外交は政治さ。

政治屋さんには政治屋さんで、いろいろと考えがあるんだろう。

ただ、シファ」

シファは決意を眼に秘めていた。

「ええ。

私は次は負けない」

皆が頷いた。

「でも、あんな可愛い子とは、本当は争うより、一緒にお茶をしたいわ」

シファはそう付け加えた。

「シファらしいなあ。一時は命に関わったのに、それでもかい？」

彼女は決然と、言った。

「私は争うために生まれたんじゃない。

争いを未然に思いとどまらせる、抑止力のためだと思ってます。

それが戦略兵器です。

だから。

私は強くならなきゃいけない」



## 離陸の朝

---

夜があけた。

朝に下った訓練統裁部の命令は、匍匐飛行地形追従システムの試験だった。  
シファとオディールのペアでの飛行訓練なのだ。

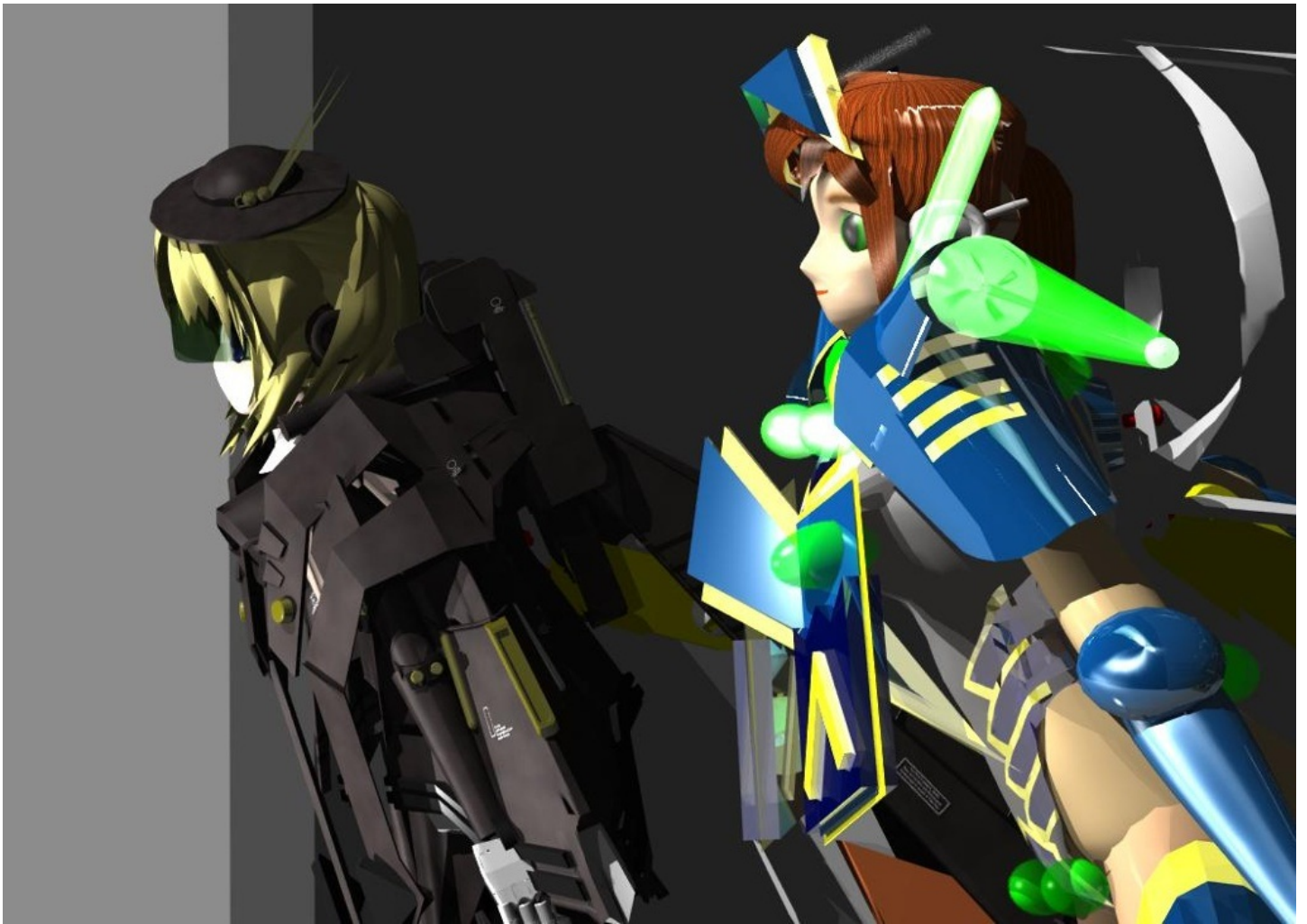
シファも、シファの周りも、拍子抜けした。

離陸準備を、ともに移送台車に乗って受ける。



運搬台車に固定されたシファとオディールは、砂漠を流れる風の音を聞きながら、離陸準備手順を進める。

常時駆動系確認、ミッション系電源投入、機関始動、空力カウル展開準備。



そのなか、シファは、となりのオディールに、さっと目礼した。

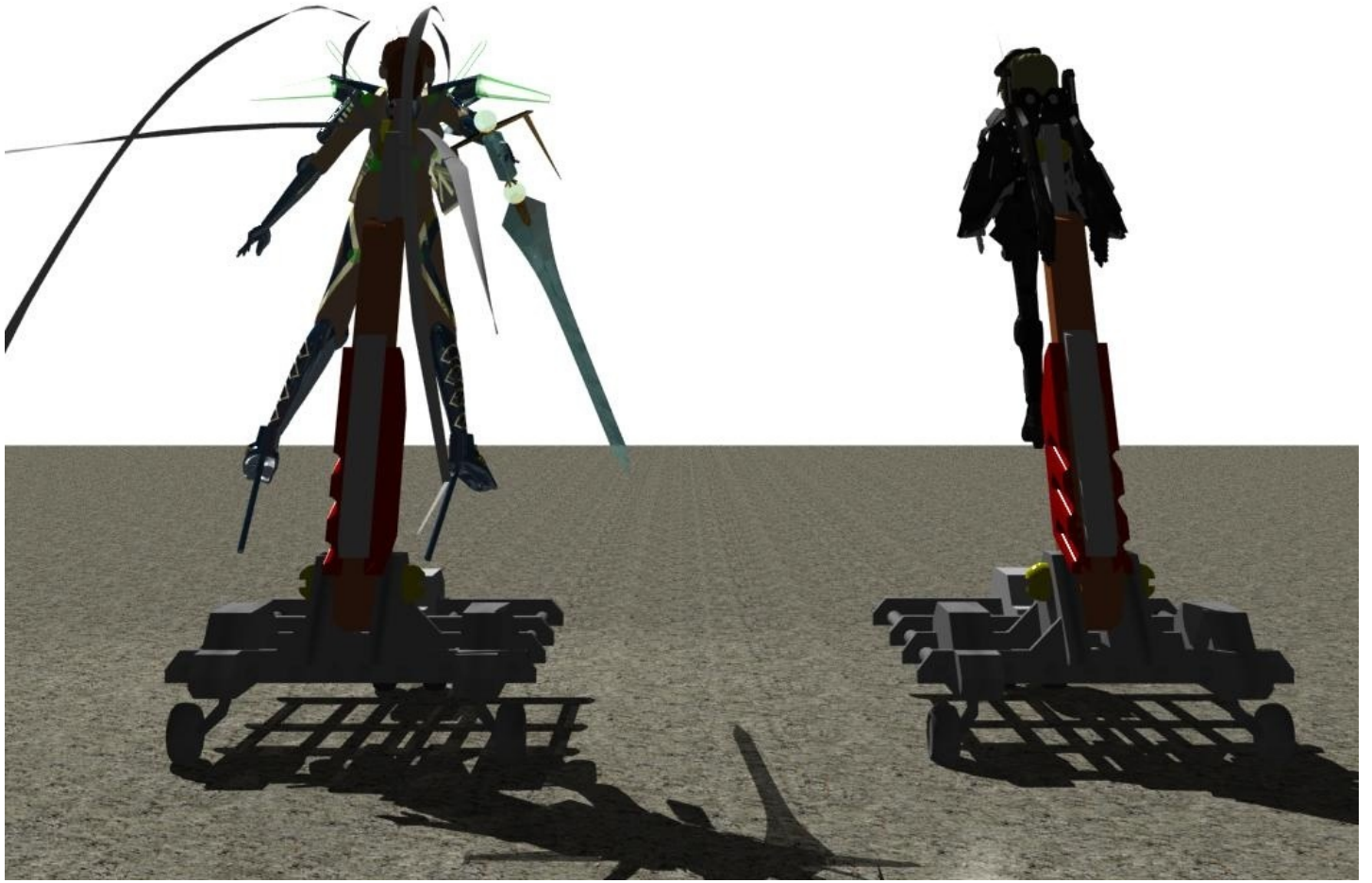
すると、オディールの顔に、ふっと赤みがさした。

シファは口にした。  
「今度、一緒にお茶しましょう」  
オディールは頷いて、こたえた。  
「そうしたいから、ここまできました」  
シファは微笑んだ。  
「あの新淡路駅でも。  
こうでもなければ、私にそれは許されない。  
私はまだ兵器でしかないから。  
だから、そうした」

オディールはそう言うと、くすっと微笑んだ。  
「そうよね」  
二人はくく、と笑った。

そして、笑いあった。

それで充分だった。  
そこに朝日が眩しく差してきた。



照らされる二人の物理天文兵器の女神は、そのなかで黄金色に輝いていた。

BN-X計画の拡充は、ここから、さらにすすんでいくことになるのだった。

<Textend>



## あとがき

---

本稿作中のXX-135「オディール」のCGモデリングと命名のアイデア、「フィールドリムバー」のアイデア作成は、ArtistSide (<http://artistside.com/>) におけるUr氏によるものです。ご協力・ご提案にここでお礼を献じます。

本稿の誤りはすべて米田淳一 (YONEDEN) によるものです。

## JDS、XX-135の要目

---

物語、酒泉模擬戦の前、XX-135（後にオディールと命名）の要目

### ■XX-135級BN-Xについて

BN-Xの戦略兵器としての能力をオミットした代わりに高度戦術機能に特化し、さらに高度全天候救難から防衛任務までこなすマルチロールシップというふれこみで共同開発が始まった本機はXX-135という開発名を与えられた。

1隻あたりの予算規模を2個重空中空母機動群分の維持費を必要とするBN-Xに比べて戦艦2隻分に経済的にスリム化し導入・維持を容易にし、なおかつ先行しているBN-X戦術ネットワークへの参加能力を持つことで機能的に正規BN-Xと遜色ない機体を保有しようというのが計画の骨子である。

### ■JDS計画、XX-135のライバル、XX-132

開発国は欧州連合、とくにドイツ・イギリス・フランスを中心としたグループで、それにオランダ・イタリア・スペイン、さらに中立を国是とするスイス・スウェーデンまでもが参加した。

しかしアメリカ・民主中国・統一韓国・オーストラリア・ニュージーランドの環太平洋グループがXX-132を同時期に計画開発し、国際環境の安定化のためにBN-Xシステムの供給をどちらか一方に絞ることとなり、競作となった。

そこでその競作開発プログラムは全体でジョイント・ディフェンシブ・シップ（JDS Joint Defensive Ship）計画と称されることとなった。計画規模は最終的に導入を目的とした開発参加国が増えたため、22世紀における最大の予算規模・計画規模の戦闘艦開発プロジェクトとなる。

両機はそれぞれXX-135がドイツ・ノルトホルツのグラーフツェッペリン記念航空団開発センター、XX-132がアメリカ・グロームレイク・エリア51射場内・ドリームランド開発センターで全規模設計・静強度試験・物理データモックアップ試験による対センサー識別回避能力試験をクリア、それぞれ初号評価試験機が進空して初期調整を終了、現在両機は比較試験の場となるゴビ砂漠の秘密航空基地で戦闘能力評価試験を開始している。

目下順調に火器実射撃を含めた試験までスケジュールをすすめ、両機ともアクティブ加速度制御やダメージ回生システム、スモールシルエット光学システムなどBN-Xシステムに完全に依存しないエアフレーム能力について、目下トラブルなく開発作業が進行している。

しかし開発費の高騰により、供給側の日本などは両機に並行してBN-Xシステムを供給するわけには行かず、またXX-132とXX-135の共同開発国の思惑が一致せず、両陣営の間だけでなく、その陣営内での競合もが表面化しつつある。

その現時点での開発作業ではシステムフレームとしての評価は甲乙つけがたく、そこでBN-XをBN-XたらしめているBN-X技術の搭載導入についてどのベースラインを搭載するかの問題が浮上し、日本を中心としたアジア共同体も、どこまでBN-Xシステムを公開供給するか、判断は政治の段階になると考えられている。

そこでイギリスなど欧州連合はそこで予備案としてBN-Xシステムの供給が得られない場合に、BN-Xシステムを搭載せずに独自開発を進めてきたFMS- mk4x「フッケバイン」統合戦闘システムを搭載する

計画もあるとしているが、フックバインシステムの能力は開発試験中のため未知数であり、フル規格BN-Xシステムの取得導入が第一選択であるとの意見は当の欧州連合軍内部でも強い。それは2隻だけとはいえフル規格BN-Xシルフ・エウロパを運用している運用者の実感でもあるようだ。

#### ■XX-135の装備・シファ級との外観比較

XX-135の外観は、まず深いダークグレーの塗装である。これは必要に応じて色彩を変更する光学迷彩システムのデフォルト表示であり、任意に変更できるとともに、精密レーダー波の吸収能力を持ちながらAN/APQ-687フラットパネル多素子センサーを植えこんであるスマートスキンセンサーである。

これはシファ級にも搭載しているものだが、面積的にシファ級よりも大きく、精度向上が期待されている。識別用にパステルカラーの表示も可能である。

また肩の装甲はスカート形態との可変システムを採用、シファ級ではグローバルAR表示ホログラフィであった装甲を物理オブジェクトとして搭載することで抗堪性を向上しようとしている。

シファ級では鎧はホログラフィ表示であって実際は装甲ではないかわりに接触防止・自動回避センサー（ATS-P Anti Touch System - Programable）を搭載、接触前に防御することとしているが、XX-135ではATS-Pを導入してもなお、物理接触に備える計画である。

そのためシファ級ではホログラフィ表示を停止することで着脱と同じ効果を持つアーマーをこのXX-135では格納する必要性が生じているため、設計難易度は向上しているが、十分なモックアップ試験の上での採用であり、弱点とはならないと考えられている。

逆にシファ級ではこだわって採用した物理自己切削可変翼をXX-35ではオミットしている。

非常にパワフルなMT-DT373A系のエレクトリックジェット機関を搭載しているのは同じであり、シファ級でも可変翼は重量を増大させる割には機動性能への寄与が少なく、またエンジン全停止状態でも滑空無音降下可能であってもシールド使用時にはエネルギー消費も発生音響も可変翼で制限した以上に発生するため必要性に乏しいとの批判があった。その点でXX-135はそれを踏まえた合理的な設計であるといえる。

またシファ級のあちこちに搭載されて特徴となっていた球状のセンサー、「アイボール」OPS-24高速多波長パッシブ画像センサーの代替としてリベット状の外観を持つOPS-E26「サイクロプス」多センサー複合パッシブ画像センサーに更新している。OPS-24は1つの球状センサーがダウンしても他のセンサーで合成視界を得るとしていたが、OPS-E26ではセンサー1ユニット内にセンサーを多数収容して不調時に感応力をユニット内で補完するため、センサー全体のシステムの信頼性が飛躍的に向上、能力的にシファ級を上回っている。

またシファ級の頭部ティアラはXX-135では可動式バイザーとなり、戦闘時には眼の位置に下ろすこととしている。シファ級の頭部ティアラは頭頂部方向へのシールド展開のためとされていたが、シファ級の運用試験の結果では全方位シールドバリアの展開に必ずしも要しないとされ、現在は単なる識別用に展開しているため、それよりも顔面の防御を優先するためのバイザー化はシファ級よりも合理的な設計である。

#### ■BN-Xシステムの導入について

BN-Xシステムは嚮導BN-Xとしてのシファ・ミスフィへ与えられたベースラインW、そして第1期国際



共同保有BN-XグループのベースラインVがあり、現在XX-135やXX-132といった（JDS）への導入用に「ベースラインR」が用意されつつある。

初期BN-Xはベースライン1と番号を付番していたが、BN-X8機体制となって以来、ベースラインはアルファベットで付番し識別することとなった。

ベースラインWはBN-X全機の指揮管制誘導システムを含むもので、フラッグシップとして突破遠征戦闘団の広範囲での戦場情報共有の中心となるものである。

ベースラインVはその情報共有システムをクライアントシステムにとどめた代わりに火力指揮システムを強化し、突破遠征戦闘団の前衛機としての役割を担う。

そしてJDS用のベースラインRはベースラインW・Vから戦略攻撃用大量破壊システムをオミットし、そのかわり戦術情報共有システムの柔軟性を向上させて多用途BN-Xとしての運用の柔軟性を向上することを主眼としている。戦略兵器としての機能はないが、火力防御力ともに正規BN-Xと同等を計画し、遠征戦闘団の中核としての火力を発揮することを期待されている。

BN-Xシステムの最大の特徴、人工生命としての自己自律判断戦闘能力については、シファ級で得られた事例を解析した結果、SILVER/Dキーという自律意思アルゴリズムを実装し、ZIOT/UCFなどといった問題のあった遠隔操作システムを排除し、自律意思を尊重し人格を認め階級的にも一般の戦艦艦長と同じ大佐とすることで十分な欺瞞状況化での安定性を実現できると結論が出ている。配備された場合は1隻ずつ大佐と扱い、その上で支援艦艇と戦隊を組み、人間の将補・少将の戦隊司令を置くことがベストと考えられている。それはBN-Xシステムではどのベースラインでも共通である。

#### ■JDS/BN-XXとCL-X計画の関係

注記するが、同時に戦術救難専用のBN-Xダウングレードとして「ミニ規格BN-X」と俗称されるコード名CL-Xも開発中であることは知られているが、これはこのJDS計画とは別のものであり、計画目的のみならず予算規模・開発規模も全く異なっている。一部でCL-XをBN-Xの輸出用モンキーモデルと扱っている論があるが、全くそれは当たらない論である。

#### ■BN-X時代の到来をつげるか、JDS/BN-XX

結果的にBN-Xは現状で嚮導タイプ2隻・突破タイプ6隻で8隻が任務についているが、このJDS計画による次世代BN-Xは現在防衛予算の概算要求されているだけでも24隻にもものぼり、JDS計画完成時には32隻ものBN-Xが就役し、艦艇の世界は本格的なBN-X時代となると考えられる。

しかしそれに伴いBN-Xを長期間運用するための支援艦艇・支援部隊の配備も必要であり、その部隊を護衛する盾となる舞台も必要であり、その点で既存艦艇を完全に置き換えることはないと考えられる。

戦艦としての破壊力と攻撃力をもちながら女性サイズ女性型の筐体にそれをおさめたBN-X級は、高高度・低空侵入だけでなく人間にまぎれての脅威国への潜入と任務遂行能力を持ち、通常の正規軍同士の戦闘だけでなくテロリストとの不正規戦でも高度な能力を発揮する。

テロの恐怖に対しては一般に最大の政策的対策として貧困の撲滅がいわれているが、現実には貧困を起すことで政治力を保ち他国の脅威となる勢力もあり、そこで貧困への先進国のさまざまな援助を裏打ちする高度な不正規戦能力が求められていた。

BN-X計画はその点も主眼として、「平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めている国際社会」に大きく貢献できると期待されている。

なお、XX-135は初度試験機ではあるが試験終了後はBN-Xシステムの搭載非搭載にかかわらず第1次改装を行い、初度任務能力を獲得した時点で命名されることとなっているので、現時点ではXX-135と型式番号でのみ呼ばれている。その正式な命名は欧州艦隊の通例では欧州連合議長夫人が行うこととなっているが、現在の欧州連合議長は女性であるため、その夫が命名するのか、それとも多忙を極める議長本人がおこなうのかは、正式名とともに目下これも未定である。

プリンセス・プラスチック・プラス／約束の空

<http://p.booklog.jp/book/21710>

著者：米田淳一

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yoneden/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/21710>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/21710>